

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 3 日現在

機関番号：12613

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2010～2012

課題番号：22652029

研究課題名（和文） ロシア貴族屋敷文化研究—その社会的諸相と文学性

研究課題名（英文） Study on Russian Country Estate Culture --Its Social Aspects and *literaturnost'*

## 研究代表者

坂内 徳明 (BANNAI TOKUAKI)

一橋大学・大学院言語社会研究科・特任教授

研究者番号：00126369

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、ロシア近代の社会と文化に関する諸問題を考える上で不可欠なウサーヂバ（貴族屋敷）の文化史的意義を考察することにあつた。その結果明らかになったのは、17 世紀から 20 世紀初頭まで存在したウサーヂバが、「中世＝封建的」要素を持ちながらも、18-19 世紀に大きく発展し、1861 年農奴解放後に衰退し、1917 年ロシア革命後に旧ソ連社会の表層から消滅したにもかかわらず、その文化的機能は現代まで継承されていること、いわば「文化的記憶」あるいはロシア文化の基層としての機能を果たしていることである。

研究成果の概要（英文）：The main object of this academic project is to examine the significance of the Russian country estate (usad'ba) from the viewpoint of cultural history. And it is elucidated that country estate which had the "medieval-feudal" aspects, had developed in 18-19 century, after the emancipation of the serfs in 1861 had declined, and by the Russian revolution in 1917 had died wholly, however, the Russian estate culture has survived and been succeeded as "cultural memories" or "substratum" of Russian culture.

## 交付決定額

(金額単位：円)

|        | 直接経費      | 間接経費    | 合計        |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2010年度 | 1,200,000 | 0       | 1,200,000 |
| 2011年度 | 700,000   | 210,000 | 910,000   |
| 2012年度 | 500,000   | 150,000 | 650,000   |
| 総計     | 2,400,000 | 360,000 | 2,760,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：ロシア貴族屋敷（ウサーヂバ）、ウサーヂバ文学史、近代文学の創成、文化資源、貴族文化、ロシア文化の基層、文化的記憶の場

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究代表者は、これまでロシア民俗学、民衆文化史を主要な専門としてきたが、その研究過程にあつて、18 世紀半ば以降に急速に形成されていくいわゆるロシア文化、特に貴族文化のダイナミズムとそれを醸成していった貴族屋敷という場に注目した。この貴族屋敷というゲシュタルトこそが実体かつ言説としてのロシア文化を生み出す原動

力となった、というのが本研究者の仮説となった。

(2) 本国ロシアにおける研究状況を管見する限り、1980 年代半ばのペレストロイカ期から 1991 年ソ連邦崩壊後にかけての時期に、それ以前は完全にタブー視されていた貴族文化ならびにウサーヂバ研究が完全に「復権」し、ソ連時代の一部の文化（史）研究の成果を取り入れながらも、続々と新たな注目

すべき成果を生みつつあったことが顕著であり、そのことは本研究者の背中を強く押すこととなった。本国ロシアの注目すべき仕事には事欠かないが、それらを通じて特徴的なことは、①人文・一部社会科学的研究の実に多くの分野の研究者がこの貴族屋敷文化という現象に強い関心を示したこと、しかも、②それがたんなる目先の「流行」としてではなく、旧ソ連時代のきわめて地味な、ほぼ忘れかけられていた「地下水的」研究を探り当て、それらの成果を十分咀嚼していたこと、さらに、③貴族屋敷文化を文字通りの「現在文化」一現在ならびに未来のロシア文化一として捉え、文化資源・文化的景観の維持・保全という問題設定の下で議論し、研究を進めていく方向で共通していた点であり、そのこと自体が本研究の重要性を物語ると考えられる。こうした本国ロシアの問題関心の在り様を正面から受止めるべきであるとの思いは、本研究者を強く捉えることとなった。

(3) 以上の背景の下、本研究代表者は2002年度以降、各種のプロジェクト（民間財団奨励金ならびに科学研究費による）を断続的に遂行し、現地調査ならびに文献調査を行ってきたが、2010年度に開始された今回の科学研究費助成事業は、こうしたこれまでの調査研究の延長線上に位置づけられるものである。

## 2. 研究の目的

(1) 第一の目的として、ロシア貴族屋敷（ウサーヂバ）の文化史的意義を確認した上で、ロシア文化史・精神史の視点からウサーヂバを理解・記述する方法を明らかにすること。

ウサーヂバは17世紀後半から20世紀初頭・ロシア革命期まで存続した各種貴族の所領地とそこに建てられた屋敷・各種施設ならびにそれらを取巻く庭園等各種環境が織りなす世界を軸としながら、最終的にはそこに収斂される農民・農奴の生活・習俗空間までも想像させる、きわめて多面で多様な対象である。しかもウサーヂバは観念性＝「文学的」「情緒的」イメージとともに想起されることが多いこともウサーヂバ研究を複雑化させてきた大きな要因である。他の多くのディシプリンと比較して、ウサーヂバという対象への視座と論述・記述方法をより明確に意識化しておかなければならぬ理由が大きいと考えられるが、そのことは、本国ロシアでの研究史を点検することによっても明らかとなる。

(2) 研究目的の第二は、上記した第一とも関連するが、ウサーヂバ研究の「統合性」、「学際性」を研究ストラテジーとして前進させること。

ウサーヂバという対象自体がきわめて多様で多面的であること、それに対応して、ウサーヂバ研究もきわめて多分野に及ぶこと

から、この第二の目的は当然導かれるとしても、そのこと自身の意味を問い直す必要が生まれてくるはずである。関連学問領域で見れば、建物ならびに各種施設に対する建築学・庭園学・植物園芸学、貴族地主による領地所有に対する社会経済史・貴族文化史研究、邸内の各種文化に対する芸術・インテリア学等々から始まる多数の個別現象とそのディシプリンはそれぞれ重要な発見と問題をもたらす。しかしながら、それらに通底し、かつそれらを緊密に結びつける視点の重要性は無視できない。ウサーヂバという場で繰り上げられた生活・習俗の総体、自然観や世界観、そこで生み出された各種の表現・芸術作品をも含む文化総体を視野に収めた「統合的」アプローチの可能性を明らかにすることは、本研究の大きな目的の一つである。

(3) 第三の目的は、(1)のウサーヂバの文化史的意義の確認を通して、ロシア文化史・精神史全体の再構築へのプロセスを提示することにある。

20世紀においては、初頭にウサーヂバが崩壊し、社会・制度レベルでは消滅し、そのことと対応する形で、ウサーヂバ研究ならびに貴族文化を中心としたロシア文化史は、一部の言及や例外を除いては十分に書かれてこなかったと言える。1980年代以降、そうした傾向は徐々に修正され、ウサーヂバ文化ならびにその研究の意味が見直されてきたとはいえ、未だ十分ではない。

加えて、旧ソ連時代にごく一部の文学者（トルストイ、ツルゲーネフ、チェーホフ等）の領地屋敷が博物館として機能していたとはいえ、圧等的多数の貴族屋敷跡はほとんどが他の機能を持つ施設へ転用されるか、放置に任されるか、廃墟となってきた。そのことにたいして1990年代以降のロシア社会がどのような対応を取りうるか、という問題群は、文化財保護という問題を越えて、より大きなパースペクティブを生む。現代における過去の文化資源の存続・継承、さらには今後のロシア文化の在り様をめぐる問題がウサーヂバ研究から見えてくるはずである。ウサーヂバが現在（と未来）のロシア人の生活観・自然観、時間・空間観を理解する上で欠かせぬ重要なファクターであると考えられる本研究者の視点からしても、ウサーヂバ文化の歴史と機能・構造の解明は文化史・精神史研究の新たな方向性をもたらすと考えられる。

## 3. 研究の方法

(1) 準備段階における作業内容与方法

ウサーヂバがきわめて複合的・多面的現象であることから、なによりもまず、多分野・多領域に拡散したウサーヂバに関する基本情報の整理作業を行った。その際の基本的確認事項ならびに作業・研究の方向性は以下の

通りである。①ウサーヂバをめぐる概史のまとめ。特に18世紀後半から19世紀初頭・前半の「頂点」を中心とする。②地域的分布、その際には、精力的に研究・調査されているモスクワ近郊（ポドモスコヴィエ）の事例を、「ウサーヂバ研究会」メンバーが作成した分布図を参照しながら分析・検証する。また、他の地域として、特に本研究で現地調査も行ったペテルブルグ近郊についても多数の情報を入手する。③ウサーヂバ研究史の再確認作業。この点についてはモスクワの「ウサーヂバ研究会」会員ズロチェフスキイ氏の数点の著作があり、また、彼との個人的コンタクトも得た。④個別要素（例えば、建物―母屋たる邸宅ならびに各種施設・庭・並木道等、植生・園芸・畑、邸内の芸術―インテリア・家具・食器等々、美術品・楽器等々）の基本項目の整理を通して「ウサーヂバ語彙集」の準備。これに関しても、上記「ウサーヂバ研究会」が編集中であるとされる「ウサーヂバ百科事典」の立項リストを参照できるかどうかの可能性も探る。

#### （2）具体的位相の選択と方法

（1）にあげた準備作業は、その作業内容からすればある程度の調査で終了ということにはならず、その後の具体的研究の進捗と合わせて継続されることとなるが、研究方法そのものとしては、ウサーヂバをめぐる具体的な側面と位相を選択する必要性が生まれる。今回の研究として選ばれたのは、①ウサーヂバ研究史の「原点」に戻る意味から、「ウサーヂバ学」を最初に構想し具体化させた1920年代モスクワの「ロシア・ウサーヂバ研究会」に着目し、その理念・活動・時代に関する文献調査を行うこと、そして、②具体的なウサーヂバ事例の場として、ウサーヂバが多数存在したモスクワ近郊ではなく、あえてペテルブルグ近郊にあって、旧ソ連時代に修復され、今は博物館として機能しているプリューチノを対象に選び、現地調査ならびに文献調査を行うこと。

#### （3）方法面での実績

本研究の3カ年の中で、ロシアの現地ウサーヂバへの調査（ペテルブルグ郊外のプリューチノ、ロジデエストヴェノ）、モスクワで目覚ましい活動を展開している「ロシア・ウサーヂバ研究会」への公式訪問の他、文献調査も精力的に行った。むろん、18-19世紀に大きく発展したウサーヂバは全体として数がきわめて多く、地域的にも広範囲にまたがっており、現在の保存状況も多種多様なもので、それらを網羅的に調査することは不可能であったが、それでも現状に関する可能な限り多くの情報収集につとめた。また、上記研究会とのコンタクトができたことから、最新の研究動向もたえず知り得る状態となっている。

#### 4. 研究成果

2010-2013年度に行われた本研究で得られた成果は以下のとおりである。

（1）ロシア貴族屋敷（ウサーヂバ）の基本的な歴史と構造に関する基本的調査と研究にから得られた知見として、

①ロシア史全体から見て、ウサーヂバは17世紀に誕生、18世紀半ばから19世紀初頭までに大きく「発展」、19世紀後半のロシアの「大改革期」・産業革命期に衰退し、20世紀初頭、特にロシア革命期に完全に消滅した。その面からすれば、近世・近代への「突入」直前からその崩壊へ、中世末期から現代直前までを「一気に」結びつける現象としてウサーヂバが機能していたことは、西欧の中世封建的社会・文化や日本の荘園との大きな差異を見せている。

②誕生時期にモスクワとその近郊に大きく流布していたウサーヂバ「層」の上に、ロシア帝国成立後に新興貴族を中心に新たに与えられた領地の「層」が重なる形で成立していることからすれば、モスクワとペテルブルグ、両都市とその近郊（地方）、中世と近代、古ロシア的なものと西欧的なもの等々（中心と周縁、都会と田舎他）といったロシア文化史をめぐるいくつかの基軸と基層とが交差し、複合化した現象こそがウサーヂバであるということが明らかにされた。

③上記したように、ウサーヂバの「成長・発展」が18世紀半ば以降19世紀初頭・前半までに見られたということから、その時期が「ロシア文化の形成」と重なっていることは、たんなる偶然ではない。ロシア文化そのものの特徴と性格、基本構造が形作られていく過程とウサーヂバ文化とは、単に後者が前者の背景や場といった関係ではなく、不可分かつ、まさしく相互成立させるための基本的ファクターとしてウサーヂバは機能していた。ウサーヂバの文化史的意義はここにもある。

④ウサーヂバのトポスを考えるとき、それは広大なロシア全域にくまなく存在していたわけではなかった。むしろ、大きな街道から奥まった場所に設営されたが、そのことは、地主貴族のウサーヂバ空間を外界、時に中央権力から遮断する機能を持つ。そこが「巢」とか「孤島」と呼ばれたとしても、領主はそこに身内、親友、仲間、時に放浪者を囲い込み、彼らを守り、自らの強固な「私的・個的世界」（それは、時に、主として都会の邸宅で誕生したサロンの郊外版となる）を構築したのである。ウサーヂバに対してロシア貴族が示した強い「感性」「情緒」の背景に、そうした深い思いがあったことは明らかである。こうした問題は、18-19世紀ロシア近代における「人的ネットワーク」、「社交」「友情」、そして「個人、個性、個のあり方」といった問題群との関連を考える上でもきわ

めて重要な方向性を示すことが判明した。

⑤ウサーヂバとロシア文学との関係性については、本研究のサブタイトルに「文学性」を含めた経緯もあって、研究当初から絶えず関心を向け、資料等の収集は行っていた（この間に、本国ロシアでは、18-19世紀のロシア詩に表現されたウサーヂバ表象を多数の詩人によるテキストをまとめたアンソロジーがいくつか刊行されている）。にもかかわらず、大きな成果をあげるに至らなかったことはきわめて残念である。ただし、この問題は、たんにウサーヂバがロシア文学の主要な舞台であるとか、多くの作家が貴族出身で、そこで生まれ成長した、精神形成を行った、あるいは地主としての体験が領地文学としてのウサーヂバ文学作品をもたらす源泉となった、というレベルの言及や研究は意味しない。個別作家ならびに作品とウサーヂバとの関係性については、それを把握する上での理論的・思想的枠組そのものを明確に構築しておかねば、所詮はバイオグラフィをなぞるか、別バージョンの印象批評を作るといったことにしかならない。やはり当初から構想していた「ウサーヂバ文学史」についても同様である。この点については、本研究を継続して行う次の科学研究費助成による研究に課題として残るものとなる。

以下(2)-(5)は、主に形式的な側面から見た成果として、

(2)ウサーヂバ研究史の検証と本国ロシアに見られる基本的論点の確認、その関心の枠組みと広がり、視点と理論的背景等について概観することができた。その全体像については、現在準備中の未掲載論文「ロシア・ウサーヂバの文化史—その文献解題によせて」にまとめてあり、「紀要」等に近く発表する予定である。

(3)ロシア現地のウサーヂバ調査によって、ウサーヂバの基本的イメージを得たとはいえ、ウサーヂバの数の膨大さと各ウサーヂバの「個性」と多様性については、いまさらながら驚嘆せざるをえなかった。訪問した中から、特にペテルブルグ郊外のウサーヂバであるプリューチノを選択し、事例研究の対象とした。具体的には、このウサーヂバの歴史と文化的活動の拠点としての意味を文献調査により明らかにした。それに関しては、(5)の報告論文集に掲載された研究協力者による論考3本に詳しい。また、プリューチノ（現在はオレーニン記念・文学博物館）の訪問調査で面談した館長マズール氏からは貴重な資料と情報が得られ、同氏とはコンタクトを取ることができる状態となっている。

(4)ウサーヂバ研究の分野で目覚ましい活躍を展開している「ロシア・ウサーヂバ研究会」との直接コンタクトを取ることができたことに加えて、この会の1920年代における

活動の意義について日本ではじめて紹介できたことは大きな成果である。特に、2011年2月には、この会を実際に訪問し、会長のヴェデーニン氏はじめ多くの研究者と貴重な情報交換を行ったことは、上記した1920年代の同会の活動について論じた論考をまとめる際に大きな「原動力」となったと言って間違いない。

(5)本研究の行われた3ヶ年の間の論文成果として、2012年度末に刊行した報告論文集「ロシア貴族屋敷文化研究」（全体で95ページ）がある。ここには、研究代表者ならびに協力者の論文を合わせてモノグラフ論文5本、そして代表者による序論的総論1本が収録されている。目次は以下の通り。

はじめに

#### I ロシア貴族屋敷について

#### II ロシア貴族屋敷研究史をめぐる諸問題

1. 「1920年代のソ連におけるロシア貴族屋敷の研究—ズグラと ОИРУ の活動」

#### III 貴族屋敷のケース・スタディ

1. 「プリューチノと帝立公共図書館」
2. 「ロシア貴族とウサーヂバーオレーニンと別邸プリューチノ（1）」
3. 「ロシア貴族とウサーヂバーオレーニンと別邸プリューチノ（2）」
4. 「ロシア中世庭園の終焉—帝室イズマイロヴォ領地屋敷の変遷」

以上

ここには、ロシアの研究協力者からの寄稿論文（ロシア語）も含まれており、これによって本国ロシアにおけるウサーヂバ研究にも影響を与えることは疑いない。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

- ① 坂内徳明、1920年代のソ連におけるロシア貴族屋敷の研究、言語文化、一橋大学言語学研究室、査読無、49巻、2012、49-74

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

坂内 徳明 (BANNAI TOKUAKI)  
一橋大学・大学院言語社会研究科・特任教授  
研究者番号：00126369

##### (2) 研究協力者

N. V. ニコラーエフ (NIKOLAEV NIKOLAI)  
ロシア・ナショナルライブラリー稀観本部門  
主任

坂内 知子 (BANNAI TOMOKO)

国際基督教大学・講師